

「セーフガード政府調査における主要指標の概要」のポイント

平成13年10月

財 務 省

経済産業省

農林水産省

ね ぎ

1. 「輸入の増加の事実」に関する指標

輸入量

1999年から増加、特に2000年では対前年16,178トン増加し、37,375トン。過去5年間で25倍。

国内市場占拠率

1999年は5%、2000年は8.2%、2001年(1-3月)は9.6%。

2. 「国内産業の重大な損害の事実」に関する指標

販売

国内平均価格は下落し、2000年は対前年比▲26.0%。同じく販売額は▲23.2%。

生産

生産量はほぼ横ばい。作付面積は2001年産は減少し、対前年比▲3.5%の見込み。2000年産の価格が続けば更に減少との意向調査の結果。

損益

2000年の収益性は減少し、10a当たり、1戸当たりとも対前年比▲55%。

3. その他関連する要因等

輸入の増加の時期と損害の時期は同じ。

国産と輸入品で外見・用途の差はなく、卸売業者の多数は国産価格の下落理由を輸入の増加と見ている。

2000年における国内平均価格の下落のうち、輸入及び国産出荷の増加による影響を比較すると、輸入増加による影響が大きい。

生しいたけ

1. 「輸入の増加の事実」に関する指標

輸入量

1998年から増加し、2000年は1997年に比べ61.6%増の42,057トン。

国内市場占拠率

1998年は29.7%、2000年は38.5%、2001年(1-3月)は50.8%。

2. 「国内産業の重大な損害の事実」に関する指標

販売

国内平均価格は1998年以降下落し、2000年は1997年に比べ▲12.1%。同じく販売額は▲21.0%。

生産

出荷量は1999年から減少幅が拡大し、2000年は1998年に比べ▲9.4%。

損益

1998年以降所得の減少幅が拡大し、2000年の所得は1997年に比べ▲60.0%。

3. その他関連する要因等

輸入の増加の時期と損害の時期は同じ。

国産と輸入品で外見・用途の差はなく、卸売業者の多数は国産価格の下落理由を輸入の増加と見ている。

生産者の年齢構成は、2000年の60歳未満の比率が68.9%と、農業就業人口の年齢構成比率よりも高い。

置 表

1. 「輸入の増加の事実」に関する指標

輸入量

1998年から増加し、2000年は1997年に比べ135.3%増の2,030万枚。

国内市場占拠率

1998年は32.7%、2000年は59.4%、2001年(1-3月)は68.6%。

2. 「国内産業の重大な損害の事実」に関する指標

販売

国内平均価格は下落し、2000年は1997年に比べ▲19.2%。同じく販売額は▲55.1%。

生産

生産量は1998年に対前年比▲15.1%、2000年は1997年に比べ▲44.7%。

損益

損益は1998年に対前年比▲50.5%、2000年は1997年に比べ▲81.8%。

3. その他関連する要因等

輸入の増加の時期と損害の時期は同じ。

国産と輸入品で外見・用途の差はなく、流通関係者の多数は国産価格の下落理由を輸入の増加と見ている。

経営主の年齢構成は、2000年の60歳未満の比率が85%でほぼ変化なし。また、後継者がいる生産農家の比率は約40%でほぼ変化なし。